

# KSKR パンジーだより



一九九六年五月一日 第三種郵便物認可 毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行

## 実践が教えてくれた信頼の力



パンジー主催の行動援護従事者養成研修が終了しました。今回あらためて実感したのは、「毎日の支援からしか学べないことがある」という事実です。

パンジー主催の研修には、国標準のカリキュラムに加え、パンジーが30年以上積み重ねてきた現場経験をそのまま盛り込んでいます。架空のケースではなく、実際の映像で支援のプロセスを見てもらう——これがパンジーならではの学び方です。

### 小さな信頼を重ねたAさんの変化

パンジーに来たころのAさんは、暴れる・物を壊す・自傷行為をくり返していました。私たちは「怒らない」「暴力をふるわない」などの支援の基本を守りながら、ただひたすら話を聞き、そばに寄り添い続けました。

その結果、Aさんは配置転換する職員に「これまでありがとう」という手紙を書いてくれたのです。その一言に、信頼を育む支援の本質が凝縮されていると感じました。

### 私たちが伝えたかった「3つのこと」

「訴えやこだわりには必ず理由がある」「行動の奥に潜む不安に寄り添う」「困った行動より、うまくいった関わりをチームで共有する」。これらを映像を介して体感できたことが、受講生の皆さんにとって何より大きな学びになったと思っています。

研修終了後のアンケートには「現場で試したい」「チームで話し合いたい」と前向きな声が多数寄せられました。支援者の心が動けば、その先にある強度行動障害と言われる人の未来も動く。

私たちはこれからも、毎日の支援に根ざした研修で信頼の力を伝え続けていきます。

（林 淑美）

パンジーだからできた映画

## 「つばさをひろげて ～私たちは地域でくらしたい～」

監督 小川道幸

入所施設をなくすをテーマに、映画「大空へはばたこう ～自立への挑戦～」を制作して2年。しかし、入所施設は必要だという考えは、まだ多くの人が持っています。その理由は、「障害の重い人は地域では暮らせない」。

昨年、厚生労働省は、グループホームで暮らすことが難しい強度行動障害の人を最長2年間入所させ、集中支援をするという方針をつくり、そのための入所施設を新しく造る計画をたてました。入所施設で訓練をすれば、地域で暮らせるようになるのでしょうか。また、訓練という考え方は、本人の立場に立った支援なのでしょうか。

「強度行動障害がある人が地域で暮らすためにはどんな支援が必要なのか」この問いの答えはパンジーで見つかりました。パンジーで活動している152人のうち、強度行動障害のある人は92人います。その人たちが、地域で暮らすことは難しいと思われてきたなかで、ほとんどの人がグループホームで暮らし、なかにはひとり暮らしの人もあります。なぜそんなことが出来るのか？そのヒントは、パンジーのこれまでの30年の経験の中にある。それを探れば答えを見つけることができるはずだ。そんな思いで「つばさをひろげて」の制作に取りかかりました。

まず始めたのは「強度行動障害のある人の今」を見つめよう。それを知ることで、何が問題なのかを知ることができる。そして、パンジーの人たちが地域で暮らすことができるのはなぜなのか。その答えを探るために、パンジーで活動する強度行動障害の人のこれまでの歴史や育った環境を調査、取材をしました。また、支援をしてきた職員にも、どんな支援をしてきたのかを聞き取りました。

そこから見えてきたひとつは「仲間の力」。強度行動障害があるけれど普通学校に通い、今は自立してグループホームで暮らす人。どこも受け入れてくれるところが見つからないなかで、あきらめないで粘り強く受け入れてくれるところを探した人。また、当事者との間に粘り強く「信頼」を築いてきた支援者たちは、どんな意識で当事者と向き合ったのか。そして、入所施設から出て重度訪問介護の制度を使って一人暮らしを始めた人がたどった道のり。最後に、パンジーで共に活動する仲間が語ってくれたのは「一番大切なのは共感」。

そして生まれたのが「つばさをひろげて  
～私たちは地域でくらしたい～」





## 一步を踏み出す勇気を

### ドキュメンタリー映画『大空へはばたこう』の魅力



2023年に完成したドキュメンタリー映画『大空へはばたこう～自立への挑戦～』は、6つの章を通して「入所施設は本当に必要なのか？」という大きな問いを私たちに投げかけます。その問いは決して抽象的なものではなく、日々の暮らしを生きる当事者の視点に根差しています。スクリーンに映し出されるのは、制度や仕組みの話だけではなく、一人ひとりが地域で生きることをめざす姿。観る人は、知らず知らずのうちに「自分ならどう考えるだろう」と心を揺さぶられていきます。

映画は東大阪から始まり、北海道、東京都、愛知県、静岡県、神奈川県、滋賀県、京都府、奈良県、広島県など、全国およそ 22 か所で上映されました。これまでに 3,000 人を超える方々が作品と出会い、それぞれの胸に問いと希望を持ち帰ってくださいました。香川県高松市では、自立支援協議会の研修に活用されるなど、実際の地域づくりに活かされています。今後も和歌山県や埼玉県、島根県などで上映が予定されており、この映画への関心が広がり続けていることを実感します。

さらに2025年7月には、海を越えて台湾での上映も実現しました。日本と地理的には近いものの、福祉の仕組みが大きく異なり、寄付に支えられて活動している団体が多いと聞きます。そのような中で、ピープルファーストを通じた交流が縁となり、上映が決まったのです。一方で「台湾の言葉に誰が訳すのか？」といった課題も持ち上がりましたが、予定が先に決まり、そこから知恵を絞っていく——そんな「走りながら考える」姿勢はパンジーらしさを象徴しています。



そして9月には、アラブ首長国連邦で開かれたインクルージョン・インターナショナルの国際会議でも上映され、監督の小川道幸さんやプロデューサーの林淑美さんらが会場で思いを語りました。映画を観た多くの人からは、「このような映画は大切です。私たちはこの映画から多くのことを教えてもらいました」という感想が聞かれました。

日本に目を戻すと、映画をきっかけにパンジーを訪れる人も増えています。「強度行動障害のある人の暮らしは、映画のようにうまくいくのだろうか」「実際の現場ではどんな支援が行われているのか」「わが子の地域でも可能だろうか」など、一人ひとりに様々な思いがありますが、パンジーとの出会いの中で、「どんなに障害が重くても、地域で暮らせるかもしれない」という希望の芽が生まれています。映画がもたらす小さな希望の積み重ねが、社会を変える大きな力になることを願っています。

この映画は、ただ観て終わる作品ではありません。観た人の心に問いを残し、地域や暮らしについて考えるきっかけを与えてくれる——そんな一步を共に踏み出してみませんか。(池辺昌史)

## 投票はみんなの権利！

～選挙をもっと身近に～



今年 4 月より、私は選挙勉強会の担当になりました。これを機に、当事者の皆さんと「選挙とは何か」「なぜ投票するのか」など、講師の菅谷泰行先生から、選挙の基本を一緒に学び始めました。

最初は選挙の知識に不安があったのですが、支援者の私が緊張していたら、当事者も不安になるかとも思い、堅苦しくならないように、楽しく、気軽に組み組める雰囲気づくりを心がけました。小さな笑いも交えながら、「難しそう」ではなく「ちょっと面白いかも」と感じてもらえるような勉強会を目指したのです。

7 月の参議院選挙まで時間の余裕がありませんでしたが、その短い期間の中で、当事者の皆さんが真剣な表情で取り組む姿を見て胸が熱くなりました。これまで私は、当事者が選挙に行って投票するという当たり前のことを、考えたことがありませんでした。しかし、18 歳以上であれば誰もが投票する権利があり、それを行使するのは当然のことです。この「当たり前」を当たり前として捉え直すきっかけとなり、私自身の価値観にも変化が生じました。

そして、パンジーから期日前投票に行く日、午前中は、皆で「政見放送」を見ました。候補者の言葉が難しかったりするのですが、当事者の皆さんの真剣な様子は印象的でした。その中の一人が「僕の一票で日本が変わってほしい」と話していました。

午後はいよいよ投票の本番です。みんなで東大阪市役所へ向かいました。道中は笑顔もあり、和やかな雰囲気でしたが、投票所に着くと一転して表情が引き締まり、緊張感が漂い始めました。投票用紙を手にしてブースへ向かうと、つい支援者として「手伝わなければ」という思いが先走りそうになりますが、そこはぐっと堪え…。その結果、最初は緊張していた様子の当事者も、自分のペースで動き出すことができ、スムーズに投票を終えることができました。また、視覚障害のある当事者は点字での投票が必要となりますが、投票所のスタッフのサポートにより、本人も安心して投票を終えることができたのです。

当事者と一緒に選挙へ行き、投票を見守るのは私にとっても初めての経験でした。そしてこの日の出来事は、大きな学びと気づきがありました。すべての人に投票する権利があり、当事者が自信を持って社会参加する世の中を作っていく。その積み重ねが、地域や社会全体を少しずつでも前向きに変えていく力になると思います。

今後も、選挙勉強会の取り組みを通して、当事者一人ひとりの可能性を広げる支援をしたいと思います。そして、次の選挙でも、皆さんと一緒にその一票の重みを感じながら、学びを深めていけることを楽しみにしています。

(西村佳史)







8月27日から2泊3日、総勢24名で台湾旅行に行ってきました。初めて海外に行く人も多く、みんな出発前からドキドキワクワク。

到着して最初に感じたのは、「台湾のごはんは本当に美味しい！」ということ。特に2日目に食べた小籠包は大人気。初めて海外旅行に参加した半山さんは「台湾楽しすぎる！」と、めちゃくちゃいい笑顔でした。故宮博物館で歴史を学び、十分でランタンを飛ばし、九份の不思議な街並みを散策。映画の世界に迷い込んだような雰囲気、誰もが目を輝かせていました。

いわゆる強度行動障害があると言われていた人達も一緒に行動しています。野山さんは、台湾の市場やランタン飛ばしに大喜び。大深さんは小籠包をパクッと一口で食べてめちゃ熱そう。でも、嬉しそう。山崎さんは出発前から期待しすぎて不安定になったものの、旅行中はとても落ち着いて楽しんでいました。



車いすで参加した西田さんは、かなりの美食家です。「おいしいわ」と何度も言いながら台湾料理に舌鼓。泉保さんは普段よりも食が進み、黙々と小籠包を味わっていたのが印象的でした。

パンジーの旅行は、参加したい人はみんなが行けるシステム。支援にも気合が入る…と言いたところですが、一番楽しんでいたのは支援者本人かもしれません。何しろ他では味わえない特別な体験ができるのですから！

台湾の文化や食事、街の雰囲気を五感で味わい、日本とは違う体験をみんなで共有できたことは、とても大きな思い出になりました。「また海外旅行に行きたいね」という声も多くあがっています。さて次はどこに行きましょうか！（西野貴善）





## 各場だより

### ☘ コーヒーの香りに 包まれて ①

自立ホーム「はやぶさ」で暮らしている北川勝哉さん。夕食を終えると、いつものようにコーヒー豆を挽き始めます。

両手でミルを持ち、ゆっくりとしたりズムでガリガリと回す音がホーム内に響きます。その表情は穏やかで、香りを楽しんでいるのか、それともこれから口にするコーヒーへの期待を膨らませているのか、どちらとも言えるような機嫌の良い笑みを浮かべています。

途中、ミルの音が止まり、支援者を呼ぶことがあります。どうやら豆が詰まってしまったようです。

少し手伝い、再び北川さんは、楽しそうに豆を挽き始めます。その動きは急ぐでもなく、丁寧で、コーヒーを挽く時間そのものを味わっているように見えます。

豆を挽き終わると、次はドリップ。



お湯が落ちる音とともに広がるコーヒーの香りを感じながら、できあがりを静かに待っています。

そして淹れたてのコーヒーを手に取ると、一口ずつゆっくりと味わい、そのひとときを楽しんでいます。ホームの空間全体に、ゆったりとした流れを感じます。

「生活の質」という言葉の意味は、こうした穏やかで満たされた時間を、少しずつ増やしていくことなのだろうと、そう思わせてくれます。

(見館史郎)

### ☘ 自分のペースで 暮らすという自由 ②

グループホームで暮らしていた小松原剛さんが、この9月から、一人暮らしを始めました。グループホームの生活では、介護者がそばにいるからこそ「できなかったこと」「やらなかったこと」も多かったのかもしれません。整理整頓を支援者と一緒にしても、いつも三日坊主で、どうしたらよいのか迷うこともたくさんありました。

そんな中、ホームで仲間との関係が行き詰まったことが「一人暮らし」への一歩となりました。

新たな暮らしを始めた小松原さん。家に帰れば、ごはんの盛り付け、食器洗い、掃除、洗濯。その後は自分の時間です。これまでは、毎日お母さんと連絡を取っていましたが、「今日はしない、いい」と、自立を感じた。

これらの小松原さんの変化を見て、支援者が今まで「やりすぎでい

た」ことに気づきました。

今、小松原さんにとって一番大きな喜びは「自分のペースでゆっくり過ごせる」と言います。その自由を、これからはそっと支えていきたいと思っています。

(吉川大喜)



## パンジーで見つけた 楽しさと仲間

3

三宅凌太郎さんがパンジーⅢに通い始めて3カ月が経ちました。

通所前の体験に来た際、作業をしていると、大先輩の生田進さんが声をかけてくれました。作業内容やパンジーの歴史について楽しそうに話す生田さんに、三宅さんは嬉しそうに耳を傾けていました。

6月から正式に通所を開始。最初は少し緊張した様子でしたが、職員と一緒に1日のスケジュールを確認し、いざ仲間の輪の中へ。すると生田さんがすつと近づいてきて、丁寧に作業のコツを教え、三宅さんは真剣に説明を聞き、分からないことは積極的に質問していました。

昼食時には「生田さんと一緒に食べたいです」と自ら伝えて実現し、とても満足そう。初日を振り返り、「あつという間に過ぎました」と、緊張の中にも笑顔が見られました。

2日目には、生田さんの隣に座り、勇気を出して話しかけ、さらに同じ



机で作業していた仲間の中谷理佳さんにも興味津々。やがて生田さんを中心に三人で会話が始まり、その輪に樋口廣さんも加わって大盛り上がり！  
そして3カ月が過ぎ、持ち前の集中力とまじめきで、作業では中心的存在になっていきます。周囲の仲間や職員にも積極的に話しかけ、時には冗談を言って場を和ませています。  
「パンジー、楽しいです」と笑顔で語る三宅さんの姿に、私たちも励まされています。  
これから冗談や笑顔で、いっしょに楽しみましょう！（山田雄二）

## 徳島⇄香川、 広がる仲間の輪！

5

7月12日～13日、徳島で開かれたグループホーム学会全国大会に、当事者3人と職員1人で参加しました。

参加した高鉾由美子さんは、徳島の当事者が発表した障害者権利条約が特に印象に残ったそうです。「どこで、だれと、どのように暮らすかは自分で選び決める権利がある」。

今年6月からグループホームで生活を始めた高鉾さん。これからの暮らし方を考える大きなきっかけになったようです。私たち支援者も、当事者一人ひとりの希望や夢の実現を共に考えていきたいと思いました。

8月23日には、学会を通じて



仲良くなった『徳島ともの会』のみなさんを迎え交流会を行いました。徳島の岩花有香さんと藤山さんの活動報告は、まるで漫才みたいで笑いが絶えず、みんなもぐいぐい引き込まれていました。

この日の交流会は、Vの当事者が中心になって考えました。

活動報告も自分たちで考え、司会や発表も「やってみたい！」と立候補したり、相談して決めました。話すのが苦手な人には「一緒にやろうか？」と声をかける仲間もいて、「緊張する」と言いながら何度も練習していました。

交流会は楽しく、皆が大満足していました。

これからもネットワークを広げ仲間を増やし、上映会や、ピールファースト大会などにつなげていきたいと思っています。（平福貴行・白川美智子）



## 書き損じハガキ、(未使用) 切手を送ってください！

ご家庭や会社などで書き損じのハガキ、スタンプを押していない切手など眠っていませんか？

当事者活動部門ではこれらを集めて活動資金にあてています。ご協力お願いします。

○書き損じはがき、切手をありがとうございました。 榎本純・仁美様 池田俊一様

## パンジーでは、後援会員を募集しています。

賛助会員 1 口 1 ヶ月 500 円 本会員 1 口 1 ヶ月 1,000 円

特別会員 1 口 1 ヶ月 3,000 円 郵便振替番号 00950-1-300551 クリエイティブハウス「パンジー」



### 上映会を開きませんか？ DVD も好評発売中！

知的障害がある人たちについて、もっと知ってもらうために、社会を変える力にしていけるために  
パンジーメディアは、出張上映会や自主上映会を応援しています。

シンポジウムや人権の研修会、学校の授業、事業所の研修など、パンジーメディアの映画を通して、  
語り合いや交流の輪が生まれ、知的障害がある人たちへの理解が広がっていくと思います。

費用・内容は、**パンジーメディア 072-968-7151** にお問い合わせください。

メールでもOKです！ [pansymedia@pansy-net.or.jp](mailto:pansymedia@pansy-net.or.jp)



## 【“私の歴史”が LL ブックに！】

このたびヤマト福祉財団様より「障害者福祉助成金」をいただきました。知的障害のある方が自分の人生を振り返り綴った“私の歴史”を、LL ブックとして出版するプロジェクトへのご支援です。

LL ブックとは、誰にとってもわかりやすい「やさしいことば」で作られた本のこと。

一人ひとりの物語に、大阪商業大学高等学校 美術コースの生徒さんが心を込めてイラストを描いてくれました。障害のある方と初めて出会った高校生たちも「深く知ることができた」と話してくれています。助成を決定してくださったヤマト福祉財団様に、心より感謝申し上げます。



編集人 クリエイティブハウス「パンジー」

東大阪市東鴻池町 2-4-8

TEL:072-963-8818 FAX:072-963-8825

発行人 関西障害者定期刊行物協会

大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル4階